季節が奏でる「音」たち

校長　狩 野 博 臣

暦の上では処暑ですが、日中は夏の余韻冷めやらぬ日が続いております。とは言え、先日、明け方に薄ら寒さを感じて目が覚め、足もとに追いやられたタオルケットを急いでお腹にのせました。まだ遠くからですが、朝夕の風に秋の足音が聞こえてきます。また、お風呂上りに窓を開けてみると、草木が揺れるサーッ、サーッという音とともに汗を乾かしてくれる心地よい風が入ってきました。リーンリーンという涼やかな虫たちの鳴き声も聞こえてきます。そう言えば、暑さのためあまり外出をしなかったせいでしょうか、今年の夏はセミの鳴き声をあまり聞かなかったように思います。もしかしたら蝉にも酷暑が堪えたのかもしれません。私が子供の頃は、セミのけたたましい鳴き声が目覚まし時計がわりで、パジャマのまま近くのお寺に虫取り網と籠を持って出掛けるのが日課でした。お盆過ぎの「ツクツクボーシ、ツクツクボーシ」という鳴き声は、もうすぐ夏休みが終わるぞという合図であり、宿題に取り組むギアが一段上がるとともに、去りゆく夏に感傷的にもなったものです。近年、ツクツクボーシの声を聞かないのは私が気にかけていないからでしょうか。

古来、私たち日本人はこの「音」にも季節を感じてきました。しかし、昨今、私たちはこの季節を告げる「音」を失っているように思います。校長室にいると聞こえてくるのは、エアコンから吹き出してくる風や室外機のファンの音、自動車のエンジン音、トイレで水を流す音、電話の呼び出し音、パソコンの電子音、チャイム・・・です。日本には音や声に聴き入る文化があります。例えば、私たちには虫の鳴き声は心地よい「虫の声」として聞こえていますが、西洋人には雑音に聞こえるようです。生理学的には、虫の声を日本人は左脳で処理し、西洋人は右脳で処理するからだそうです。「虫のこえ」という童謡は、日本人独特の感性から生まれた歌なのでしょう。

あれ松虫が鳴いている　チンチロ　チンチロ　チンチロリン　あれ　鈴虫も鳴き出した　リン リン リン リン リーン リン 秋の夜長を鳴きとおす　ああ　おもしろい　虫の声

まだ言葉がよく分からない幼子には、犬は“ワンワン”、猫は“ニャンニャン”、車は“ブーブー”、牛は“モーモー”と、その鳴き声や音で教えるのも日本人ならではの音や声に聴き入る文化からくるものなのかもしれませんね。

「い～し　や～き～い～も～　おいもだよ」、「たけや～　さおだけ～」、「金魚～え～金魚っ」、そしてなぜか「ト～フ～」と聞こえてしまう豆腐屋さんのチャルメラの音・・・子供の頃に聞いていた音が日常から消えていくのは寂しいものです。今の子供たちが大人になったとき、音の原風景は何でしょうか。

９月は別名、長月。「夜長月」を省略したものというのが有力な説のようです。虫の音を聞ききながら秋の夜長をどのように過ごされるでしょうか。夏の疲れが出てくる頃でもありますので、くれぐれもご自愛くださいませ。

「リズムよく　虫の奏でる　音色かな」（山口広子）